

2日 月曜

ネヘミヤ

2:1 アルタクセルクセス王の第二十年のニサン月に、王の前にぶどう酒が出されたとき、私はぶどう酒を取り、王に差し上げた。それまで、私は王の前で気持ちが沈んでいたことはなかった。

2:2 すると、王は私に言った。「病気でもなさそうなのに、なぜ、そのように沈んだ顔をしているのか。きっと心に悲しみがあるに違いない。」私は非常に恐れて、

2:3 王に言った。「王よ、永遠に生きられますように。私の先祖の墓がある都が廃墟となり、その門が火で焼き尽くされているというのに、どうして沈んだ顔をしないでいられるのでしょうか。」

2:4 王は私に言った。「では、何を望んでいるのか。」私は天の神に祈ってから、

2:5 王に答えた。「もしも王が良しとされ、このしもべにご好意をいただけますなら、私をユダの地、私の先祖の墓のある都へ遣わして、それを再建させてください。」

2:6 王は私に言った。王妃もそばに座っていた。「旅はどのくらいかかるのか。いつ戻って来るのか。」王はこれを良しとして、私を遣わしてくださることになり、私は予定を伝えた。

2:7 また私は王にこう言った。「もしも王様がよろしければ、ユダに着くまで私が通行できるように、ユーフラテス川西方の総督たちへの手紙をいただけるでしょうか。」

2:8 そして、宮の城門の梁を置くため、また、あの都の城壁と私が入る家のために木材をもらえるように、王家の園の管理人アサフへの手紙もお願いします。」わが神の恵みの御手



が私の上にあったので、王はそれをかなえてくださった。

2:9 それで私はユーフラテス川西方の総督たちのところに行き、王の手紙を彼らに手渡した。王は、軍の高官たちと騎兵たちを私とともに送り出してくださいました。

2:10 ホロン人サンバラテと、アンモン人とその部下のトビヤは、これを聞いて非常に不機嫌になった。イスラエル人の益を求め者がやって来たからである。

ネヘミヤの「気持ちが沈んだ」姿に、王は心を碎きます。ネヘミヤは主を第一とする信仰の人であるとともに、誠実に王に仕える者でもありました。その生きる姿勢が、主に用いられてのは明らかです。

主のために役に立ちたいと願うなら、主の証のゆえにこの世の人々に誠実を示す必要があります。責任感の足りない人に主は働きを任せるとはなりません。

とはいえ、10節にあるようにネヘミヤの敵もいました。主のために生きようとする者には、的が現れることも承知しておきましょう。この世はまだサタンの裁きが終わっていないからです。しかし同時に主の守りがあることも知って、勇気を忍耐を持ちましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

